擬音語・擬態語の研究

山岡　利江

（一）はじめに

金だらいを出して顔をぶるぶる洗うと戸棚から冷たいごはんと味噌をだしてまるで夢中でざくざく食べました。

これは、宮沢賢治の『風の又三郎』からの一節である。文中の、「ぶるぶる」、「ざくざく」は、擬態語とよばれるもので、それぞれ顔を洗う様子、ごはんを食べる様子を表わしている。

しっとりサラサラ、うるおいケア。　（化粧品）

スッキリすれば？　（ガム）

ピッとピッタリおいしさつつむ　（ラップ）

これらは、商品の広告からひろったものである。このように、少し意識して見渡すと、すぐに、さまざまな擬態語を発見できる。

また、「コケコッコー」、「ニャーニャー」、「ザーザー」など、生物の声や、物体が出す音などを表現した言葉は、擬音語とよばれる。

日本語は、このような擬音語・擬態語の豊富な言語であるといわれる。

ここでは、作品中にあらわれる擬音語・擬態語を語音構造の面から分析を試みる。

その作品として、幸田文の『流れる』を取り上げる。擬音語・擬態語の印象を決める語音構造をさぐることにより、その作品の擬音語・擬態語表現の特徴を明らかにしようとするものである。

また、比較の対象として、吉本ばななの『ＴＳＵＧＵＭＩ』を取り上げる。世代の違う二人の女性作家の作品を比較することにより、それぞれの擬音語・擬態語表現についてさぐっていこうと思う。

（二）擬音語・擬態語とは

1．擬音語

①犬がワンワン吠える。

②風がピューピュー吹く。

①の下線部は、犬の鳴き声、②は風の吹く音を写し取った言葉である。

このように、擬音語とは、外界、自然界の音や声を、言語音で写し取ってつくった言葉である。

ソシュール（Ferdinand de Saussure）は、言語はsigni-fiant －聴覚映像（例えば[yama]という音声の印象）と、signifie－概念（「山」）とが表裏の関係で結びついた記号であるとした。

しかし、擬音語は、他の一般の語とは異なり、表示音との間にある種の必然性、すなわち、音象徴が存在するのである。

2．擬態語

③星がきらきら光る。

④疲れてフラフラ歩く。

③、④の下線部は、星が光る様子、歩く様子を表わしたものであるが、先の擬音語と違う点は、星が光る音、歩くときの音を写したものではないというところである。

このように、音響には直接関係のない事象の状態などを言語音によって、象徴的に表現することばである。

日本語は、擬態語の多い言語とされ、特に、心情の状態を表わすものは日本語特有であると言われる。金田一春彦氏はこれを擬情語と呼んでいる。

3．擬音語・擬態語の効果

擬音語・擬態語は、感覚に直接訴えて表現するので、これらを使用することにより、他の言葉では長々と説明しなければならないことも、ひとことで、適切に伝えることができる。

また、擬音語・擬態語は、わずか1音の違いで、微妙な意味合いを表現することが可能である。

このようなことから、文学の世界では、これらを効果的に利用し、またあたらしく創作したりすることが行われる。

文学作品以外では、話しことばに多くあらわれ、感覚に直接訴えるという点から、広告や漫画などでも、奇抜で印象的なものがつくられている。

また、日本語には抽象的な意味の動詞が多いので、

とぼとぼ歩く　すたすた歩く　よちよち歩く

のそのそ歩く　てくてく歩く

というような違いを表わすのに有用である。

（三）幸田文『流れる』について

幸田文も、擬音語・擬態語を効果的に使う作家のひとりである。その作品の中で、『流れる』（１９５７年）は、これらを、多用した作品である。

この作品では、芸者家「蔦の家」で繰り広げられる日常が、新入りの女中、梨花を中心に生き生きと描かれている。

ここでは、『流れる』の中にあらわれる擬音語・擬態語を類型化し、その表現の特性をさぐろうと思う。

まず、語音構造に着目し、擬音語・擬態語の1音節を1単位として、A，B，C，とあてはめていく。

うろうろ…ＡＢＡＢ

（同一音節は同じ文字で表わす）

また、促音・撥音・長音は、Ｑ・Ｎ・Ｒで表わす。

かっか…ＡＱＡ

ころん…ＡＢＮ

ぱーん…ＡＲＮ

「あっさり」「しっかり」などの「ｒｉ」音は、非常に多くあらわれるので、

あっさり…ＡＱＢ（ｒｉ）と特に区別しておく。

以上の手順により、語音構造の型を分析したのが表(1)である。（注1）→文末表(1)参照

表(1)より読み取れるのは、次のようなことがらである。ＡＢＡＢ、ＡＮＡＮなど、同一音節をかさねた型が多く見られる。

語の種類では、ＡＢＡＢ型に分類できる語の種類が最も多いが、これは日本語の擬音語・擬態語一般にいえることである。

また、促音（Ｑ）を含む型に分類される語の数が多いことが注目される。分類した型全体をみると、他にもＱがあらわれる型が、３３型のうち、９例ある。

Ｎがあらわれる型は９例、Ｒがあらわれる型は５例である。

これらＮ、Ｑ、Ｒ音を用いることは、文章にリズム感を出し、変化をつけることに有効である。

次に、語の種類の多い型（３位まで）について見てみる。

・ＡＢＡＢ型

延べ語数１９５のうち、一番多いもの（「ごたごた」）で、９例であり、事例数１のものが８８と、ばらつきが多い。このことは、『流れる』の擬音語・擬態語表現の多様性を示していると見て取れる。

濁音を含む語は延べ９９語ある。また、そのうち語頭に立つものは延べ８１語ある。

・ＡＢＱ型

延べ語数は、７４であるが、事例数が４以上の語がなく、事例数１の語が半分以上を占めている。

・ＡＱＢ（ｒｉ）型

延べ語数１１５中、事例数１の語は、７語しかない。１位の語（「はっきり」）の２８例は、『流れる』の擬音語・

擬態語の中で、最多である。

（四）吉本ばなな『ＴＳＵＧＵＭＩ』について

次に、『ＴＳＵＧＵＭＩ』についても、同じ方法で、分析を試みる。

『ＴＳＵＧＵＭＩ』は、吉本ばななが１９８９年に発表した小説である。主人公まりあが、海辺の町で、従姉妹のつぐみたちと過ごしたひと夏が、さわやかに描かれている。

『流れる』と同じ方法で、語音構造の型を分析したのが表(2)である。（注２）表(2)参照

表(2)より読み取れるのは、次のようなことである。

語音構造の型は、２４種である。ＡＮＡＮ、ＡＢＮＡＢＮなど、同一音節を重ねた型が多い。

語の種類では、やはり、ＡＢＡＢ型に属する語の種類が最多である。

Ｑを含む型は９例、Ｎは８例、Ｒは４例である。順位に差はあるが、語の種類の多い型は、『流れる』と似かよっている。

また、『流れる』では上位に入っていなかったＡＮＡＮ型が４位に入っていることが注目される。語の種類の多い型（３位まで）について見てみる。

・ＡＢＡＢ型

延べ語数１２６のうち、事例数１のものは４０である。上位に、濁音を含む語が入っていないことが注目される。使用されている語で最も多いもので８回であり、ばらつきが見られるが、その中で、比較的多くあらわれている「さらさら」「きらきら」などは、この小説のイメージ－少女たちの輝いた美しい季節－を象徴している語といえるだろう。

・ＡＱＢ（ｒｉ）型

延べ語数６６語のうち、事例数１の語は１６である。１位の語（「くっきり」）の９例は、この作品中の擬音語・擬態語の中で、最多である。

・ＡＢ（ｒｉ）型

延べ語数３４のうち、事例数１の語が１３語である。事例数が６以上の語がなく、ばらつきが見られる。

（五）二つの作品の比較

次に、二つの作品の共通点、相違点をさぐるべく、比較を試みる。

まず、Ｎ３３種、Ｔ２４種中、共通する型は、２０種である。Ｔの２４種のうち、４種（AQBC, AQBRN, AB(ri) AB(r

1)、(ABAB)を除いては、すべてNにも見られる型である。このことからも、Nの擬音語・擬態語表現の豊富さがうかがえる。

また、AA、AAAなど、同一音節を重ねた型は、Nだけにしか見られず、Nの特徴のひとつであるといえるだろう。

（六）母音・子音結合について

『流れる』と、『TSUGUMI』について、語音構造の面から、検討してきたが、分類した型のうち、圧倒的多数を占めるABAB型の、母音・子音結合について分析を加えることにする。

・『流れる』（127例）、『TSUGUMI』（67例）について、第一音節子音（Acであらわす）と、第二音節子音（Bcであらわす）との結合状況を示したのが、次の表(3)－1、(3)－2である。

表(3)－1 N子音結合

Bc＼Ac	p	b	t	d	k	g	c	s	z	h	m	n	r	j	w	ɲ
p								○								
b			○	○	○	○		○				○				
t	○	○				○			○	○	○				○	
d					○											
k	○	○		○		○		○	○		○	○				
g								○		○	○					
c	○	○			○	○				○						
s	○	○		○	○	○				○	○			○	○	
z						○					○				○	○
h																
m						○										
n								○								
r	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○
j			○				○			○		○			○	
w						○		○	○	○				○		
ɲ						○	○			○						

表(3)－2 T 子音結合

Bc＼Ac	p	b	t	d	k	g	c	s	z	h	m	n	r	j	w	ʔ
p																
b																
t	o	o			o	o		o								o
d										o						
k	o	o	o	o		o			o		o	o			o	o
g																
c	o	o			o											
s		o			o	o				o		o				o
z											o					
h																
m																
n						o										
r	o	o		o	o	o	o	o	o	o						o
j				o		o	o	o								
w									o							
ʔ																

表(3)－1、2をもとに、第一音節子音（Ａｃ）と結合した第二音節子音（Ｂｃ）について、各結合に該当する語の種類の大小により表を作製すると次のようになる。

（N 表(4)－1、T (5)－1）

また、それとは逆に、第二音節子音（Ｂｃ）と結合した第一音節子音（Ａｃ）の語の種類による順位表が N 表(4)－2、T 表(5)－2である。

N 表(4)－1

順位	A c	B c	順位	A c	B c
1	g	19	9	d	5
2	k	14	9	,	5
3	b	13	11	c	4
3	z	13	11	n	4
5	p	12	11	w	4
6	s	11	14	t	2
7	m	10	14	j	2
8	h	9	16	r	0

T 表(5)－1

順位	A c	B c	順位	A c	B c
1	g	15	9	d	3
2	k	10	10	c	2
3	z	6	10	m	2
4	p	5	10	n	2
4	b	5	13	t	1
4	,	5	13	w	1
7	s	4	15	r	0
7	h	4	15	j	0

N 表(4)－2

順位	B c	A c	順位	B c	A c
1	r	35	9	j	4
2	s	20	10	g	3
3	k	17	10	,	3
4	t	12	12	p	1
5	c	9	12	d	1
6	b	7	12	m	1
6	z	7	12	n	1
8	w	6	16	h	0

T 表(5)－2

順位	B c	A c	順位	B c	A c
1	r	25	9	p	0
2	t	12	10	b	0
3	k	11	10	d	0
4	s	9	12	g	0
5	j	4	12	h	0
6	c	3	12	m	0
7	z	1	12	n	0
7	w	1	12	,	0

表(3)、(4)、(5)から、読み取れるのは、次のことがらである。

(1)第一音節子音として、流音（r）があらわれることはない。

(2)第一音節子音と、第二音節子音に、同じ子音が立つことはない。

(3)第二音節子音に流音（r）が立つことが、特に多い。

(4)第二音節子音としてh音が立つことはなく、また、p音、d音、m音、n音が立つことは稀である。

(5)g音は、第一音節子音としては最多であるが、第二音節子音として立つことは少ない。逆に、t音は、第二音節子音は上位であるが、第一音節子音としては、例が少ない。

(6)s音、k音は、第一、第二とも、例が多く、結合能力が高い。

(7)Nは、Tに比べて、第二音節子音にb音が立つことが多い。

(8)Tは、第二音節子音として立つ音の種類が少ない。

(1)については、ABAB型にはNとTのどちらも例がなく、全体の型をみても、Nの「爛々（らんらん）と」の一語である。

(3)のことは、ABAB型にかぎらず、ABQ型、AB（ri）型、にもいえることであり、擬音語・擬態語の特徴のひとつである。

(1)から(5)までは、NとTに共通する特徴である。

NもTも、順位は多少違いがあるが、第一音節子音・第二音節子音ともに上位の音は似通っている。しかし、Nの方が、第二音節子音の結合の種類が豊富であるといえる。

NとTの子音結合に加えて、母音結合と語の例、事例数を示したのが次の表(6)－1・2、表(7)である。

※第一音節母音…Av、第二音節母音…Bvとする。

事例数は語のあらわれる頻度数

N 表(6)－1

Ａｃ	Ac-Bc	Av-Bv	語	事例数
p	p－t	a－a	ぱたぱた	1
		e－a	ぺたぺた	1
		e－o	ぺとぺと	1
		o－o	ぽとぽと	1
	p－k	a－u	ぱくぱく	1
		i－a	ぴかぴか	1
		i－u	ぴくぴく	1
	p－c	a－i	ぱちぱち	1
		i－ja	ぴちゃぴちゃ	1
	p－s	i－i	ぴしぴし	1
		i－ja	ぴしゃぴしゃ	1
	p－r	a－a	ぱらぱら	1
b	b－t	e－a	べたべた	2
		e－o	べとべと	1
	b－k	i－u	びくびく	2
		u－u	ぶくぶく	1
	b－c	u－i	ぶちぶち	1
	b－s	i－jo	びしょびしょ	1
		o－o	ぼそぼそ	1
	b－r	a－a	ばらばら	1
		a－i	ばりばり	1
		i－i	びりびり	1
		u－a	ぶらぶら	1
		u－i	ぶりぶり	1
		u－u	ぶるぶる	4
t	t－b	o－o	とぼとぼ	1
	t－r	o－o	とろとろ	1
d	d－b	a－u	だぶだぶ	1
	d－k	o－i	どきどき	1
	d－s	o－a	どさどさ	3
		o－u	どすどす	1
	d－r	a－a	だらだら	2

Ａｃ	Ac-Bc	Av-Bv	語	事例数
k	k－b	i－i	きびきび	1
	k－d	u－a	くだくだ	2
	k－c	i－i	きちきち	3
		e－i	けちけち	1
		o－ja	こちゃこちゃ	2
	k－s	a－a	かさかさ	2
		a－ja	かしゃかしゃ	1
		u－ja	くしゃくしゃ	1
		o－o	こそこそ	1
	k－r	a－a	からから	1
		i－a	きらきら	1
		u－u	くるくる	1
		e－a	けらけら	1
		jo－o	きょろきょろ	1
g	g－b	o－o	ごぼごぼ	2
	g－t	a－a	がたがた	3
		o－a	ごたごた	9
		a－u	がくがく	2
	g－c	i－i	ぎちぎち	1
		o－ja	ごちゃごちゃ	1
	g－s	i－u	ぎすぎす	3
		u－a	ぐさぐさ	1
		u－ja	くしゃくしゃ	1
		o－o	ごそごそ	1
	g－z	a－i	がじがじ	1
		u－u	ぐずぐず	2
	g－m	a－i	がみがみ	1
	g－r	i－a	ぎらぎら	1
		i－i	ぎりぎり	1
		u－u	ぐるぐる	1
		e－a	げらげら	1
		o－o	ごろごろ	3

N 表(6)－2

Ac	Ac-Bc	Av-Bv	語	事例数	Ac	Ac-Bc	Av-Bv	語	事例数
g	g－w	o－a	ごわごわ	1	h	h－c	u－u	ふつふつ	1
	g－’	u－i	ぐいぐい	1		h－s	i－o	ひそひそ	5
c	c－r	i－a	ちらちら	4		h－r	a－a	はらはら	5
		u－u	つるつる	1			i－i	ひりひり	1
	c－y	u－a	つやつや	1		h－y	i－a	ひやひや	1
	c－’	jo－i	ちょいちょい	1		h－w	u－a	ふわふわ	3
s	s－p	u－a	すぱすぱ	1		h－’	o－i	ほいほい	2
	s－b	a－a	さばさば	1	m	m－t	o－a	もたもた	2
		i－u	しぶしぶ	2		m－k	o－u	もくもく	1
	s－k	ja－a	しゃかしゃか	1		m－g	o－u	もぐもぐ	2
		ja－i	しゃきしゃき	1		m－s	e－o	めそめそ	1
	s－g	i－e	しげしげ	1			o－a	もさもさ	1
	s－n	i－a	しなしな	1			o－o	もそもそ	2
	s－r	a－a	さらさら	2		m－z	a－i	まじまじ	1
		u－a	すらすら	1			o－ja	もじゃもじゃ	2
	s－w	a－a	さわさわ	1		m－r	i－i	みりみり	1
		o－a	そわそわ	1			u－a	むらむら	3
z	z－t	u－a	ずたずた	1	n	n－b	o－i	のびのび	1
	z－k	a－u	ざくざく	1		n－k	i－o	にこにこ	2
		i－u	じくじく	1		n－r	o－o	のろのろ	1
		u－a	ずかずか	1		n－y	i－a	にやにや	3
		u－e	ずけずけ	1	j	j－s	a－u	やすやす	2
		o－u	ぞくぞく	1		j－w	a－a	やわやわ	1
		ja－a	じゃかじゃか	1	w	w－t	a－a	わたわた	1
	z－r	a－a	ざらざら	1		w－s	a－a	わさわさ	2
		i－o	じろじろ	1		w－j	a－a	わやわや	2
		u－u	ずるずる	1	’	’－z	u－ja	うじゃうじゃ	1
		o－o	ぞろぞろ	1			o－i	おじおじ	1
		ja－a	じゃらじゃら	1		’－r	i－a	いらいら	1
	z－w	a－a	ざわざわ	3			u－o	うろうろ	4
h	h－t	o－o	ほとほと	1			o－o	おろおろ	3
	h－g	e－u	へぐへぐ	2					

※ ’ ＝ 子音フォネーム ゼロ の場合

T 表(7)

Ac	Ac-Bc	Av-Bv	語	事例数	Ac	Ac-Bc	Av-Bv	語	事例数
p	p－t	a－a	ぱたぱた	1	g	g－r	a－a	がらがら	1
		e－a	ぺたぺた	1			i－a	ぎらぎら	2
		o－a	ぽたぽた	3			u－i	ぐりぐり	2
	p－k	i－a	ぴかぴか	1			u－u	ぐるぐる	3
	p－c	a－i	ぱちぱち	1			e－a	げらげら	1
	p－r	o－o	ぽろぽろ	1			o－o	ごろごろ	1
b	b－t	a－a	ぱたぱた	3		g－j	a－a	がやがや	2
	b－k	i－u	びくびく	1	c	c－r	i－a	ちらちら	4
	b－c	u－u	ぶつぶつ	1		c－j	u－a	つやつや	1
	b－s	a－ja	ばしゃばしゃ	1	s	s－t	i－o	しとしと	3
	b－r	a－i	ばりばり	1			u－a	すたすた	5
t	t－k	e－a	てかてか	1		s－r	a－a	さらさら	8
d	d－k	o－i	どきどき	3		s－j	o－o	そよそよ	1
	d－r	o－o	どろどろ	2	z	z－k	u－e	ずけずけ	2
	d－j	o－a	どやどや	1		z－r	i－i	じりじり	2
k	k－t	a－a	かたかた	1			u－u	ずるずる	2
		u－a	くたくた	1			ja－a	じゃらじゃら	2
	k－c	e－i	けちけち	1			ja－i	じゃりじゃり	1
	k－s	u－u	くすくす	4		z－w	a－a	ざわざわ	1
	k－r	i－a	きらきら	5	h	h－t	a－a	はたはた	2
		i－i	きりきり	1			e－o	へとへと	1
		u－a	くらくら	2		h－s	i－o	ひそひそ	1
		u－u	くるくる	1		h－r	u－a	ふらふら	1
		e－a	けらけら	1	m	m－k	o－u	もくもく	3
		o－o	ころころ	1		m－z	o－o	もぞもぞ	1
		jo－o	きょろきょろ	2	n	n－k	i－o	にこにこ	4
g	g－t	a－a	がたがた	1		n－s	o－i	のしのし	1
	g－k	a－u	がくがく	1	w	w－k	a－u	わくわく	7
		o－u	ごくごく	1	’	’－t	u－o	うとうと	3
	g－s	a－a	がさがさ	1		’－k	u－i	うきうき	1
		a－ja	がしゃがしゃ	1		’－s	i－o	いそいそ	1
		u－ja	ぐしゃぐしゃ	1		’－r	i－a	いらいら	4
		o－o	ごそごそ	1		’－r	u－o	うろうろ	1
	g－n	u－ja	ぐにゃぐにゃ	1					

次に、母音結合において、使用事例数をもとにした順位を表にしたものが表(8)である。

※事例数は、各結合に該当する語の頻度数を合計したもの（表(10)も同じ）

表(9)は、第一音節母音（Ａｖ）と結合した第二音節母音（Ｂｖ）についての、各結合に該当する語の頻度数による順位表と、逆に第二音節母音（Ｂｖ）と結合した第一音節母音（Ａｖ）の語の頻度数による順位表を[N]と[T]についてそれぞれ作製したものである。

表(8)－１

[N] 母音結合順位表

順位	Ａｖ－Ｂｖ	事例数
1	a－a	３０
2	o－o	１９
3	o－a	１７
4	u－a	１５
5	i－a	１３
6	u－u	１２
7	i－i	１０
7	i－o	１０

表(8)－２

[T] 母音結合順位表

順位	Ａｖ－Ｂｖ	事例数
1	a－a	２２
2	i－a	１６
3	u－u	１１
4	u－a	１０
5	i－o	９
6	a－u	８
7	o－o	７

N 表(9) －1

順位	Av	Bv	順位	Bv	Av
1	o	51	1	a	83
2	i	46	2	o	37
3	a	43	3	u	35
4	u	38	4	i	26
5	e	11	5	ja	11
6	ja	4	6	e	2
7	jo	2	7	jo	1

T 表(9)－2

順位	Av	Bv	順位	Bv	Av
1	a	34	1	a	58
2	u	32	2	u	24
3	i	29	2	o	24
4	o	19	4	i	14
5	e	7	5	ja	4
6	ja	3	6	e	2
7	jo	2			

※数字は結合した語の頻度数を合計したもの

母音結合について

(1) a音が、第一、第二音節ともに結合率が高い。特に、第二音節では、全体の半数近くを占めている。

(2) e音は、第一、第二音節ともに結合率が低い。

(3) 同一母音同士で結びつくことがあるのは、a、i、u、o音のみである。

e音が少ないのは、擬音語・擬態語一般にいえることであり、e音のつく語は、悪い印象をあらわすものが多い。特に、濁音を含む語の場合に、それが顕著である。

べたべた・べとべと（N）、げらげら・ずけずけ（N・T）など

以上の点は、NとTに共通していることであるが、二つを比較した場合、Nはo音が、Tはu音が第一、第二音節ともに多いことが認められる。

子音結合について、上位の組み合わせは、次のとおりである。（表(10)－1・2）

表(10)－1

N Ａｃ－Ｂｃ結合順位表

順位	Ａｃ－Ｂｃ	事例数
1	ｇ－ｔ	１４
2	ｂ－ｒ	9
3	’－ｒ	8
4	ｇ－ｓ	7
	ｇ－ｒ	7
6	ｋ－ｃ	6
	ｚ－ｋ	6
	ｚ－ｒ	6
	ｈ－ｒ	6
１０	ｋ－ｓ	5
	ｋ－ｒ	5
	ｃ－ｒ	5
	ｈ－ｓ	5

表(10)－2

T Ａｃ－Ｂｃ結合順位表

順位	Ａｃ－Ｂｃ	事例数
1	ｋ－ｒ	１３
2	ｇ－ｒ	１０
3	ｓ－ｔ	8
	ｓ－ｒ	8
5	ｚ－ｒ	7
	ｗ－ｋ	7
7	ｐ－ｔ	5
	’－ｒ	5

（事例数５以上のもの）

子音結合の組み合わせについては、Nと Tでは、事例数の大小に違いが見られる。

Nの1、2位であるg－t、b－rは、Tでは上位に入っていない。それとは逆にs、w、pが第一音節子音として立つ結合は、Nには上位に入っていない。

また、Nの方が、第一音節の濁音（g、b、z）が多い。

ここで、『流れる』と『TSUGUMI』のABAB型の母音・子音結合について、まとめて記しておく。

1．『流れる』

・母音は、第一音節母音はo，i，a，u、第二音節はa，o，u，iの順で例が多い。第二音節にくるe音は、稀である。

・母音の結合の型は、a－a，o－o，o－aの順で、e－eの結合は、見られない。

・子音では、g，k，b，z，pが第一音節子音として立つことが多く、破裂音が多いといえる。

・r（流音）が第一音節として立つ語は例がないが、第二音節子音として立つのは、r（流音）が多数を占める。

2．『TSUGUMI』

・第一音節母音はa，u，i，o、第二音節では、a，u，oが多く、eが立つことは少ない。（特に第二音節）

・結合の型では、a－a，i－a，u－uが上位三つであり、e－e型は例がない。

・子音ではg，k，zの順で多い。第二音節では、rが最多である。

・第二音節子音として立つ音の種類が少ない。

3．二つの作品の比較

・母音結合の組み合わせではa－a型がどちらも最も多い。また、e－e型はどちらも例がない。

・母音結合の組み合わせにおいて、多くあらわれる型はほぼ共通しているが、Nではo－a型、i－i型、Tではa－u型が多いのが特徴である。

・第一音節母音として立つのはNではo、Tではaが最も多い。また、どちらもeが立つことは少ない。

・第二音節母音として立つのは、どちらもaが最も多く、eが立つ例は少ない。

・子音結合の組み合わせにおいては、Nではg－t型、Tではk－r型が最も多い。

・第一音節子音として立つのは、どちらもgが最多であるが、Nの方が、濁音が立つ例が多い。

・第二音節子音として立つのは、どちらもrが最も多い。

・Nは、Tよりも第一音節子音として立つ子音の種類が多い。

（七）おわりに

『流れる』（＝N）と『TSUGUMI』（＝T）について擬音語・擬態語を語音構造の面から分析してきたが、以上の結果から導かれるそれぞれの特徴は次のようなことである。

作品中にあらわれる擬音語・擬態語を語音構造に着目して分類すると、Nは33種、Tは24種に分類できる。その中で、多数を占める型は、どちらもABAB型である。他には、ABQ、AQB（ri）、AB（ri）、AQ（N・T）、ANAN（T）などの型が語の種類が多い。

型のうち共通するものは、20種である。AA、AAAなど同一音節を重ねた型は、Nのみに見られる特徴である。

語音構造の型のうち、圧倒的多数を占めるABAB型の母音・子音結合についてさらに分析すると、第一・第二音節母音・子音ともに、頻度数の多い音は、NとTではほぼ似ているということがいえる。

しかし、第一・第二音節母音、第一・第二音節子音の結合の組み合わせにおいて、違いが見られる。

母音結合において、使用事例数の上位にあらわれる型のうち、Nはo－a型、i－i型が、Tはa－u型がそれぞれ特徴的な型である。

子音結合については、Nはg－t型、b－r型、Tはs、w、pが第一音節に立つ結合に特徴が見られる。また、Nは第一音節に濁音が立つ結合が多いことが認められる。Nでは、濁音を含む語が多く用いられており、そのことから、濁音の持つ騒がしい感じが作品中にあらわれているともいえる。

このように、擬音語・擬態語の語音構造の型の種類、母音・子音結合の種類などからNの方が擬音語・擬態語表現が多彩であることは確かである。しかし、どちらの作品も、これらの擬音語・擬態語が、作品の中で効果的に活かされているということはいえるであろう。

参考文献

『流れる』新潮社（1957）
幸田文

『TSUGUMI』中央公論社（1989）
吉本ばなな

『擬音語・擬態語辞典』角川書店（1978）
金田一春彦解説・浅野鶴子編

『擬音語・擬態語の読本』小学館（1991）
日向茂男
『日本語の語彙と表現』大修館書店（1976）
鈴木孝夫編
『日本語百科大事典』大修館書店（1988）
金田一春彦・林大・柴田武
『擬音語・擬態語』荒竹出版（1989）
日向茂男・日比谷潤子著監修＝名柄迪
『日本語はおもしろい』岩波書店（1995）柴田武
『大辞林』三省堂（1988）
松村明編
『象徴辞の用法をめぐって』長崎大学教養部紀要
福田益和先生（1985）

表(2)　T 語音構造の型

音節	型	語の種類	音節	型	語の種類
Ⅱ	AB	1	Ⅳ	ANAN	14
	AN	5		ANBN	1
	AQ	13		ANB（ri）	7
Ⅲ	ABN	8		AQBC	1
	AB（ri）	20		AQB（ri）	28
	ABQ	14		ARAR	8
	AQA	2	Ⅴ	ABABQ	2
	ARN	1		AQBRN	1
	ARQ	5	Ⅵ	ABABAB	1
Ⅳ	ABAB	67		ABNABN	2
	ABCB	5		AB(ri)AB(ri)	2
	ABCD	1		AQBAQB	1

T ……『TSUGUMI』の略号

表(1) N 語音構造の型

音節	型	語の種類	音節	型	語の種類
Ⅰ	A	1		AAAA	1
	AA	2		ABAB	127
	AB	7		ABCB	11
Ⅱ	AN	10		ABCD	4
	AQ	24		ABCN	1
	AR	3	Ⅳ	ANAN	10
	AAA	1		ANBN	1
	ABN	11		ANB (ri)	10
	AB (ri)	27		AQAQ	1
	ABQ	54		AQB (ri)	31
	ANB	1		ARAR	11
Ⅲ	AQA	5	Ⅴ	ABABQ	5
	AQB	2		ABABAB	1
	ARB	1		ABCABC	2
	ARN	3	Ⅵ	ABNABN	6
	ARQ	10		ABQABQ	4
	A(ri)(ri)	1			

N …「流れる」の略号